

古枝の歴史を歩こう



《明治18年(1885)藤津郡古枝村乙絵図》



古い江(港)があった地…古江田と呼ばれたこの地域は、
ゆうとく いなり じんじや
 祐徳稲荷神社をはじめ、多くの
 文化財が残っています。
 また、江戸時代に作られたけすいどう
 嶽水道
 (通称「とんのみぞ」)は、今も
 なお現役で活躍する水道です。
 ウォーキングがてら、古枝の古
 い歴史を楽しんで下さい。



《祐徳稲荷神社境内社 命婦社 県指定重要文化財》



アクセス

(古枝公民館まで)

【車でお越しの場合】

◆佐賀市内より……………約60分

《高速道路(長崎自動車道)利用》

福岡市内……………古枝……………長崎市内
 約120分……………約90分

◆武雄・北方I.C下車……………約40分

◆嬉野I.C下車……………約30分

【JRでお越しの場合】

◆JR長崎本線肥前浜駅下車……………徒歩約25分

◆JR長崎本線肥前鹿島駅下車……………徒歩約50分

《JR特急+祐徳バス利用》

JR博多駅……………JR肥前鹿島駅……………JR長崎駅
 約60分……………約60分

鹿島バスセンター……………古枝小学校前下車
 ……………約10分

祐徳稲荷神社方面に乗車

おおむらがた 大村方

大村方は、大村氏が藤津地方の代官として居住した場所で、寺角に若宮神社は、千葉氏との戦いで討死した大村家有を祀っている。

浜の知恩寺は、当初鮎越の古賀坂に、ついで大村方の寺角に建てられた。

また、源氏物語の注釈書「花鳥余情」に平安時代の囲碁の名手、橘 良利(後の寛蓮)は藤津郡

大村の人と明記されていて、大村方が関係あると思われる。

寺角・神宮司・柚子角・天神・松角・柿角・山下角の7小字からなる。



1 旧乗田家住宅 (市指定文化財)

旧多良海道の町並みの一角に所在する旧乗田家住宅は、元々は鹿島藩士最所家の住まいであった。

建物は木造中2階建て、寄棟造りの平入り。屋根は茅葺きで、その形状は「クド造り」だが、一般的なコノ字ではなく、一部が張り出たコの字型。建物の建築年代は19世紀初期と推定され、改変も少なく、建築当初の状態をよく伝えている。質実で武士らしい表空間が見られる一方で、畑地や比較的広い土間があり、養蚕を行っていた事も推定される。

これは、兵農未分離が特徴であった、在郷武士の生活状況をよく伝えている。この乗田家住宅は市内の在方町かつ宿場町に残る、数少ない武家屋敷遺構である。平成18年度(2006)保存修理工事が行われた。



2 飯盛酒造 (国登録有形文化財)

飯盛酒造場は、肥前浜駅から南に延びる市道が、旧多良海道の通称「酒蔵通り」に突き当たる地点に建っている。

主屋は、間口10間半の木造2階建、入母屋造、棧瓦葺で東側土間部の外壁は塗屋づくり、西側の居室部は真壁造。煙突は高さ9mの煉瓦造で、以前の銘柄「玉の香」の文字が残っている。

3 若宮神社 (祭神 若年神 相殿 大村家有 追神 菅原道真)

創立年代不詳。大村氏の勢力が藤津郡まで及んでいた頃、大村家有が代官として藤津郡を統治していた。家有が千葉氏との戦いに敗れて藤津に逃げ帰り大村方まで来た時、馬が、稲穂が垂れ下るのを防ぐためには縄(八瀬縄)に引っかかり躓き倒れ、家有も千葉勢に殺された。その後明応3年(1494)、この地を治めた有馬貴純がその非業の死を悼み、若宮社に家有の霊を相殿し、祀った。



若宮神社の石碑たち

若宮神社境内には、石祠二基、記念碑一基、自然石碑三基、石鳥居一基がある。

一番古い石碑は、寛文3年(1663)の念仏供養塔である。その他、鹿島市中心に見られる地域神「豊倉大明神」(寛政7年(1795))など。

特に珍しいのは、「磐邑霊神」の石祠。この神は、神格化された郷土の人で、鹿島初代藩主鍋島忠茂に仕え、忠茂に殉じた岸川六左衛門光久である。

4 天満宮 (祭神 菅原道真)

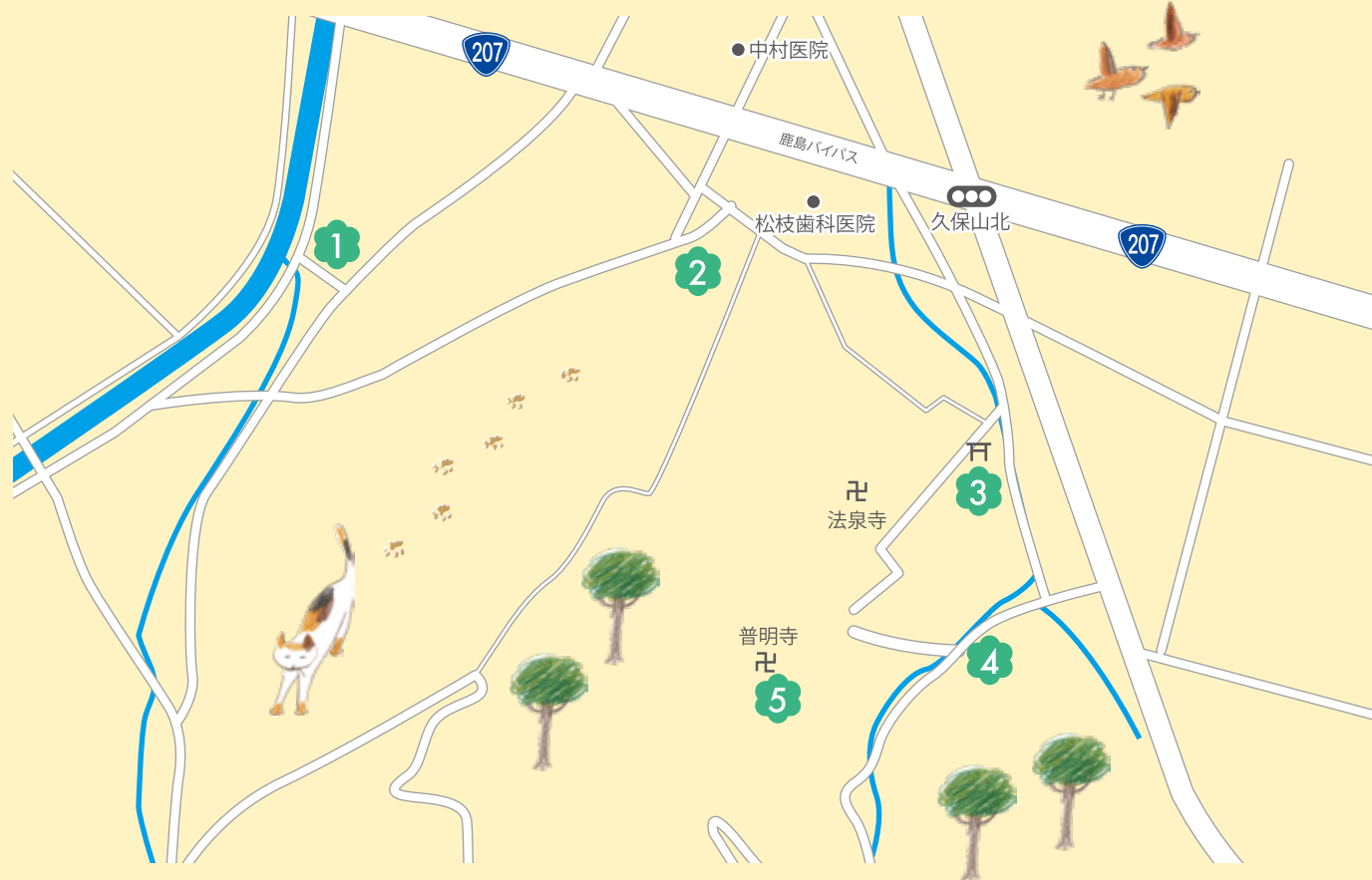


小字名は天神で古くからある天満宮である。

くぼやま 久保山



多良岳の舌状丘陵地の端に位置し、多くの古墳が存在した。(普明寺境内にあった、箱式石棺、その西南にあった巨石積みの横穴式石室墳など)江戸初期の産物に松茸があげられており(鹿島志)、昭和まで松茸はとれていた。明治9(1876)～昭和18年(1943)まで窯業地としてしられた。
一本木・眞崎・湊上・井上・若宮・百塚・安本・谷村・西谷・横谷・平谷・矢川内・寺簀・小簀・小星谷の15小字からなる。



1 天満神社(若宮)〈祭神 菅原道真〉

木造の拝殿の中に、石祠三基が祀っている。石祠は「水神宮 宝暦九年(1759)」「天満宮 宝暦九年(1759)」「豊倉大明神 寛政癸丑年(1793)」。
自然石板碑は「キャ八天狗 宝暦十一(1761)」「電大明神 天明五年(1785)」「猿田彦大神 天明五年(1785)」の三基がある。



(右奥の細長い石塔が「電大明神」)

2 石碑(久保山公民館裏) 小さな祠がある

3 天満神社(寺簀)〈祭神 菅原道真 若年神 大山祇神〉

堂内に、石祠二基が祀っている。「天満宮元禄九年(1696)」「豊倉大明神 寛政十一年(1799)」。境内には「天照皇太神宮 元禄二年(1689)」の自然石碑がある。



4 開山桂巖塔



5 普明寺(黄檗宗)

普明寺は延宝5年(1677)の創建で、浜町野畠にある泰智寺とともに、藩主の菩提寺で、代々遺骨は普明寺に、遺髪は泰智寺に葬った。伽藍は、隠元が京都の宇治に開いた黄檗山万福寺を模倣して建てられた。寺域全体が竜をかたどった建物・参道としている。
普明寺には数多くの文化財があり、仏像の中には、1300年代の朝鮮半島から伝来した高麗仏の銅像菩薩形坐像(県指定文化財)がある。また、境内の周囲と裏山は二次的な原生林となっており、植物や鳥、昆虫類が身近で観察できる。
各種建造物を含め、この寺域全体が鹿島市の史跡となっている。



6 小星堤(久保山溜池)

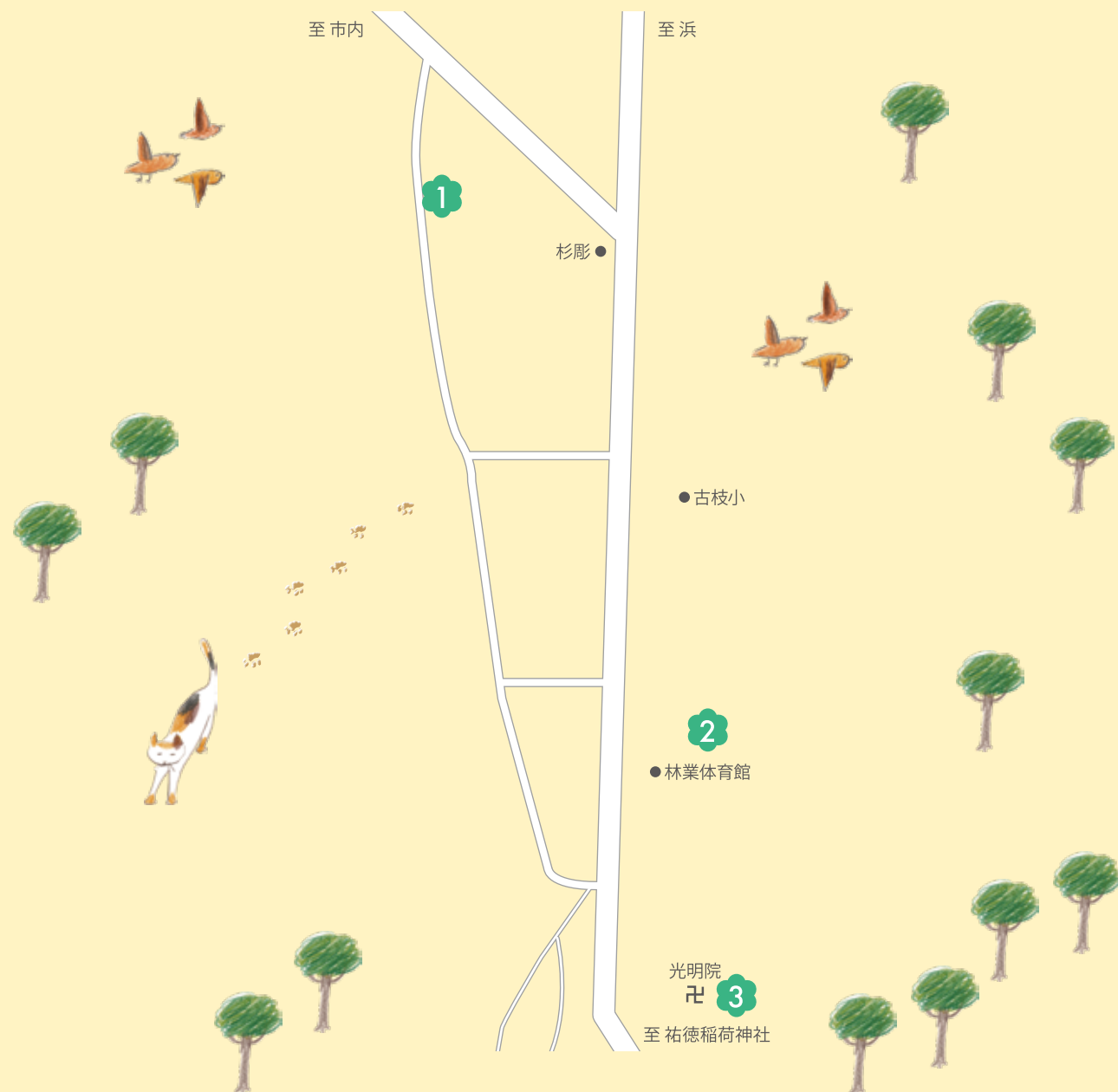
3代藩主鍋島直朝の代に築かれたもので、周囲120間、水源は能古見の小川内に求めている。昔は松茸がとれていたそう。



しもふるえだ 下古枝



古枝川(錦浪川)は、観潮河川で、かつて字岩本付近まで船がさかのぼっていた。そこで、“かつての江(港)”であったことにちなんで、古い江の田、『古江田』の地名が起こったという。
定座・八田・通山・米角・中川良・木藤・永園・堂園・一本松・岩本・西平の11小字からなる。



3 井上山光明院(浄土宗)

慶長5年(1600)、浜の浄安寺の末寺として、天蓮社長誉清公が創建した寺。文政13年(1830)本堂が再建された。
境内には六地藏塔一基、六地藏尊(六体)、地藏尊立像一基など、数多くの石造物が祀られている。

1 通山溜池

周囲90間・寛政年間築造。未だに農業用水はここから引いている。溜池の横には、天満宮があり、石祠と自然石碑が今も大切に祀られている。



2 民俗資料館

古枝公民館の敷地横に建っている民俗資料館は、昭和55年(1980)に建設。主に郷土の衣食住・生産・信仰・年中行事などの日常生活の中で使用され、作り出された民俗資料が展示されている。

主な展示資料は、日常生活用具として江戸時代の衣装箱や燭台、明治時代の供養道具・生花用具・古銭などと、生産用具として農耕用の鋤・水車・とうみ・千歯など、漁具としてガタスキー・ワラスボ掻き・海苔すみ・たこ壺、林業用の土引き用の牛鞍や木挽のこなどがある。

この他、糸車やはた織り機、配置売薬の資料や、醤油搾り機・酒造用具・船大工道具・明治時代の消防ポンプなど懐かしいものや、珍しいものが展示されている。入館無料。

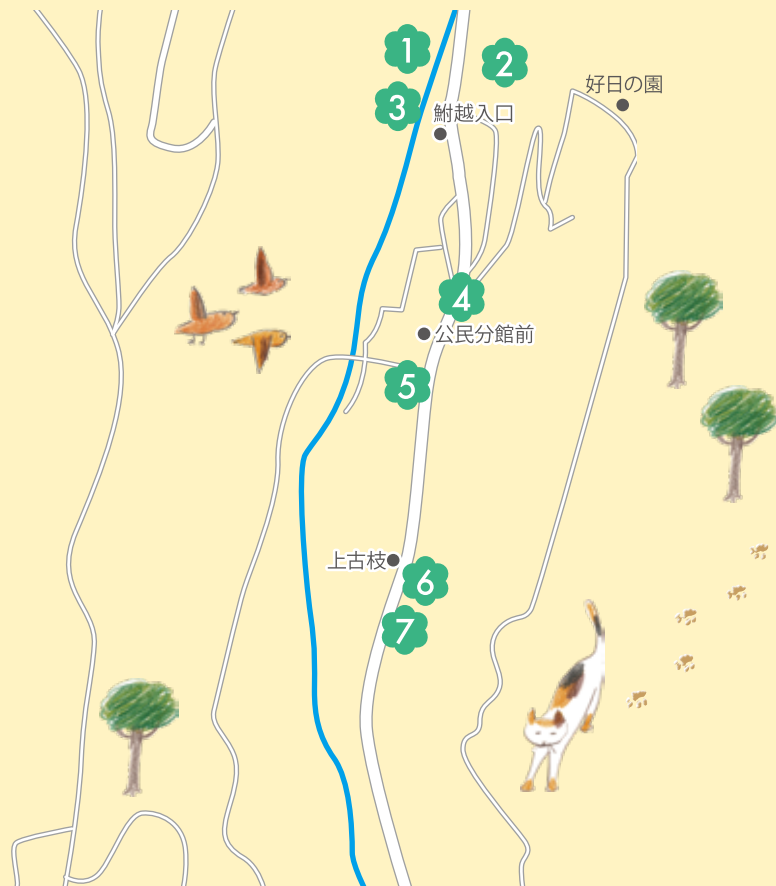


かみふるえだ 上古枝



上古枝村は江戸時代の宝暦郷村帳では、古枝村の小村で、「天明郷村帳」では1村として記されている。

地区には、祐徳稲荷神社を始め、源為朝に縁のある山祇神社や多くの石造物がある。
小峯・平野・廣瀬・奥園・彦四郎・古子の6小字からなる。



2 祐徳博物館

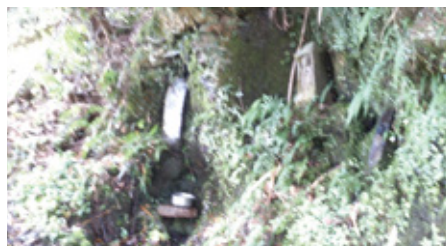
昭和30年(1964)に、祐徳稲荷神社の宝物に郷土出土品を展示する博物館として設立。

収蔵資料は、鍋島家ゆかりの品々が多いが、けんじゅうようぶん かざい しじゅうようぶん かざい
県重要文化財5点、市重要文化財3点も収蔵されている。

4 六地蔵・龍神・観音堂

ふなこえ
鮒越の登り口にある。登ってすぐのところには、六地蔵があり、その他にもお堂が二う宇、湧き水のところに、はちだいりゅうおう
八大竜王の石碑が一基、奥の墓地には、江戸時代の立派な墓石や、古い時代の板碑や宝篋印塔の残欠がある。
昔はここでもせんとうろう
千灯籠がおこなわれていた。

お堂二字、八大竜王と石仏・六地蔵・墓地



1 祐徳稲荷神社〈祭神 主神 倉稲魂大神 合祀 大宮売大神・猿田彦大神〉

祐徳稲荷神社は、日本三大稲荷の一つ。鹿島3代藩主鍋島直朝の後室、後陽成天皇の孫・左大臣花山院定好の娘の萬子が京都から鹿島に嫁ぐ時に、朝廷の勅願所であった稲荷大神の御分霊を勧請したのに始まる。

昭和24年(1949)に火災により焼失したが、昭和32年(1957)に再建された。境内社の妙婦社はかつての本殿であり、享和4年(1804)の建築で、県重要文化財に指定された。(写真右)



3 山祇神社〈祭神 大山祇神〉

- ▶天養元年(1144) 山祇神社、旧祠の跡に立つ
- ▶元文4年(1739) 大明神となる
- ▶昭和3年(1928) 現在地に移転



※祐徳稲荷神社から移してきたと思われる天井絵が残っている。

源為朝伝説～手突城～

鎮西八郎為朝がこの地に来て城を構えていた。ある朝、為朝が食膳につこうとしたところ、前の庭に子どもが来て、尻をまくって用を足そうとした。怒った為朝は弓に矢をつがえて子どもを射たところ、子どもはその矢を片手で受け止め、すぐに投げ返し、その矢が玄関の柱にあたり、屋敷が震動した。為朝は「これは神様に違いない」と恐れて、城を捨て、中尾の矢通平に移っていった。人々は、この城を手突城と呼び、その後神社を祀った。それが、山祇神社である。

5 大神宮

貞享5年(1688)
「大神宮講衆中。貞享五戊辰歳十一月六日」



6 地蔵堂

享保13年(1728)



けんれんしゃかんしょうにん
遣蓮社喚誉上人
が建立したと刻まれている。喚誉上人は、京都・知恩院の51世住職。

7 観音さん

元禄12年(1699)

「観世音菩薩、元禄十二己卯三月十八日、講衆建立」

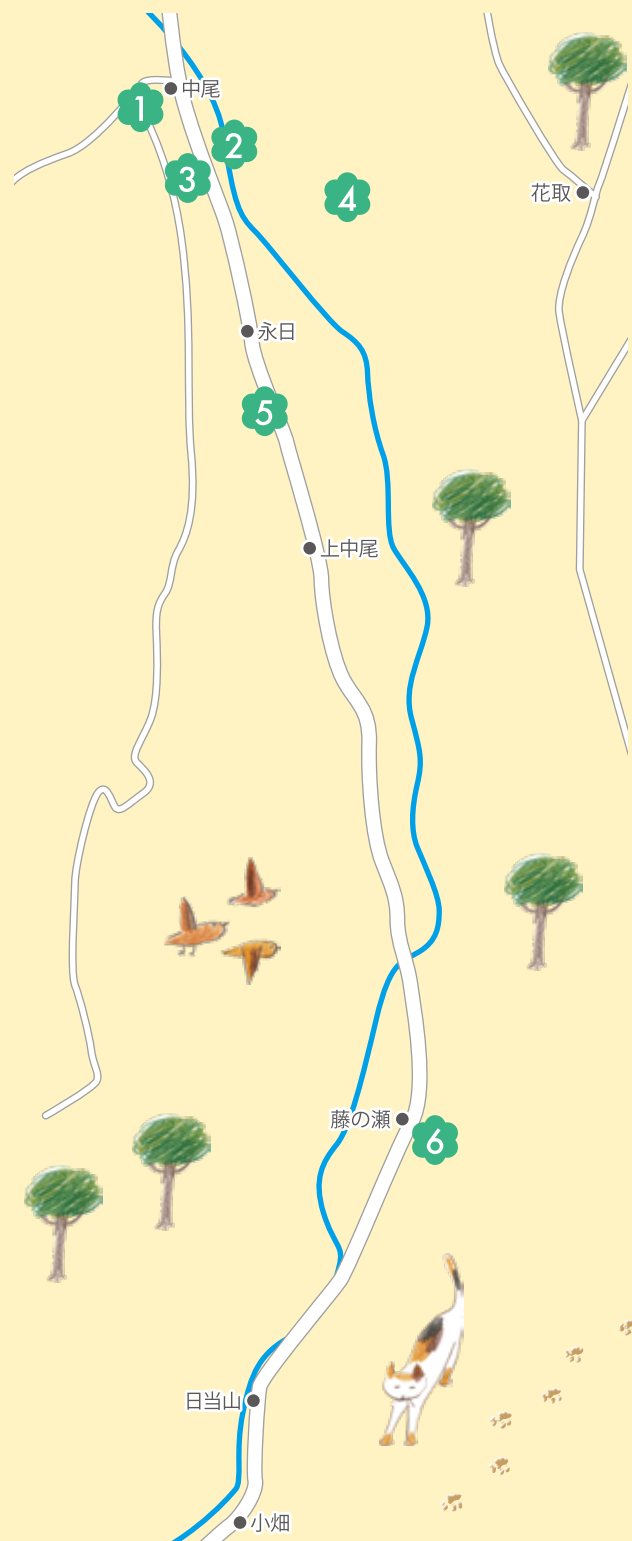


なかお 中尾



戦国時代、有馬や大村が領有するところで、大村の家臣中尾某なる者が部下数名と来住して以来、中尾村と称した。江戸時代は鹿島藩領。

小川内・門守・榎廟・瑞徳・矢通平・坂本・永田・東平・新ヶ江・祭場・二本木・平原・藤ノ瀬・立石・鳴瀬の15小字からなる。



1 北野天満宮〈祭神 菅原道真〉

由緒は古く、平家一族に味方した京都山城の荘の尾崎一族が、壇ノ浦の合戦後、この地に隠れ住み、京都で崇敬していた北野天神を祀ったのが始まりという。



4 朝顔姫の墳墓の跡

毎年1月に朝顔姫祭りが行われている

5 稲荷大明神

「稲荷大明神 慶應三年卯正月吉日 山口與…」
石祠。慶應3年(1867)。

2 中尾天満宮〈祭神 菅原道真〉

中尾天満宮は興善院の中にあったのを、延宝3年(1675)に村の鬼門守神として、現在の場所(榎廟)に移転した。社殿には、永禄4年(1561) 銘の男神と女神像があり、「平直家」の墨書銘がある。平直家は能古見本城の原城主、原尚家ではないかと考えられ、その次男は、水墨画家として桃山時代を代表する雲谷等顔である。その神像を守護するために、一木造りの狛犬が1対ある。どちらも市の重要文化財。



3 興善院(曹洞宗)

かつて、当地に松尾山西福寺があり、有馬氏の帰依寺であった。天正4年(1576)の龍造寺隆信による藤津攻めの際、配下の犬塚播磨守弾正盛家が先陣となつて有馬勢の討伐に軍功をたてたことから、森岳城主となったが、のち閑居した西福寺の傍らに森村から興善院を移転した。興善院には、文明18年(1486)の銘がある木造阿弥陀如来坐像が安置されており、宝暦13年(1763)に修理したことを示す墨書銘がある。境内には明和5年(1768)に建てられた自然石の鳥獣供養塔がある。「為猊転鳥獣同證菩提 明和五戌子年四月九日」と銘が刻まれており、市内では唯一の鳥獣供養塔である。



6 藤の瀬地蔵堂

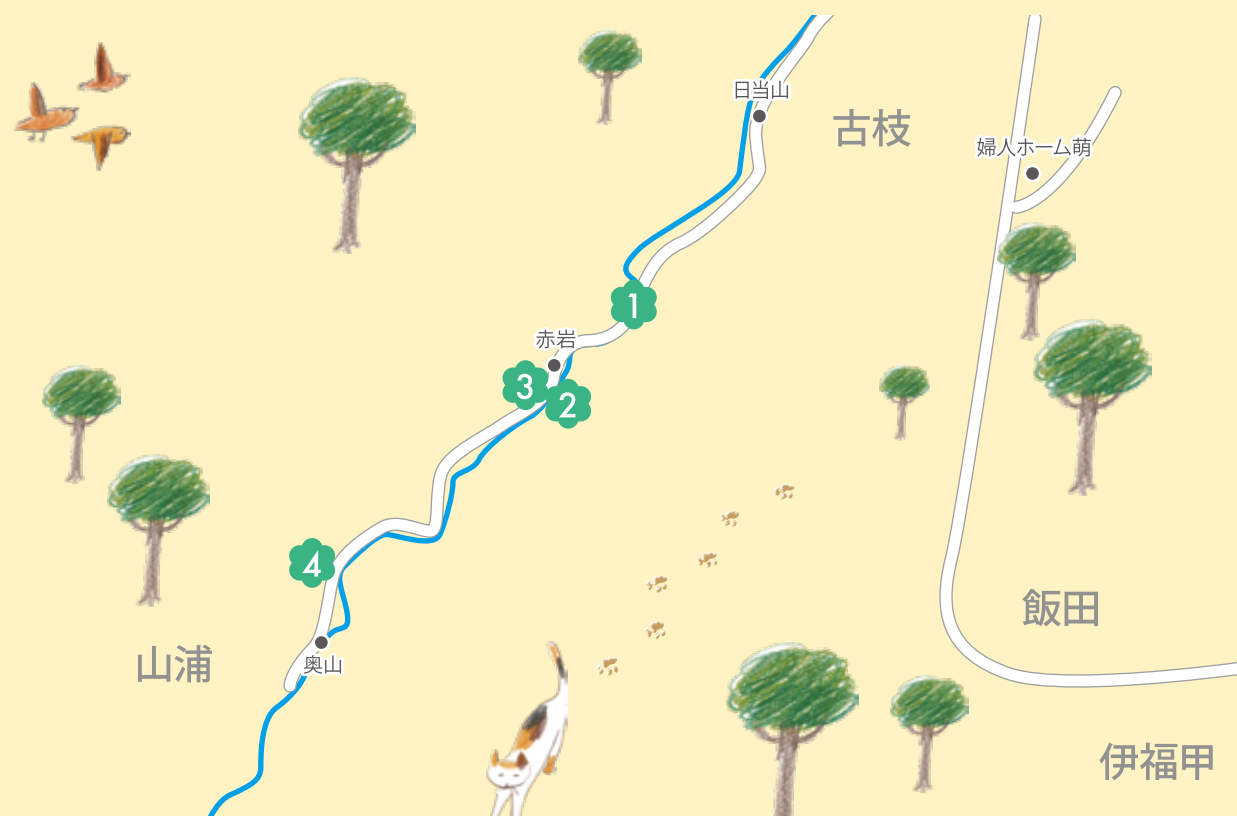
地蔵堂に安置された延命地蔵菩薩は「中尾興善院の住職が母ヶ浦の宝聚寺の住職であった時、夢のお告げがあり、海岸にいったら、香木で刻んだ仏像が流れついていた。和尚は喜んで持ち帰り、寺に祀った。その後、藤の瀬に小さな堂を建てて安置した。」と由緒が伝わる。延命地蔵尊の霊験はあらたかで、鹿島藩3代藩主鍋島直朝はこの地蔵を厚く信仰し、ここを藩の祈禱所にして藩の安泰を祈った。この地蔵菩薩は子どもの寝小便を治したり、様々な願いを叶える地蔵として知られ、江戸時代には地蔵信仰の霊場として栄えた。



奥山



元々本藩領であったため、いまでも大字音成に属する。とんのみぞ^{たけすいどう}（嶽水道）の取水口があり、この水道は現役で活躍中。明治29年（1896）～昭和47（1972）年まで奥山分校があった。瀬戸・高野平・西河内・片木・赤岩の5小字からなる。



1 鳴瀬峠

江戸時代、中尾までは鹿島藩領、鳴瀬峠を越えると、佐賀藩領だった。鳴瀬峠を過ぎて、浜川にかかる橋を渡ると、権現森がある。
寛政4年(1792)に松岡神社の宮司が鹿島藩に提出した文書には権現森が「奥山赤岩・鳴瀬／間、佐嘉・鹿嶋御境所」にあり、享保4年(1719)に建立された石祠があると記されている。これにより、権現森が、佐賀藩に属する奥山・赤岩と鹿島藩に属する鳴瀬(中尾区)の境界を祀る、とても重要な場所だったことがわかる。現在、権現森には「大権現」の石祠を祀っている。



2 嶽水道取水口

江戸時代の^{ふなこえ}鵜越地区に農業用に水を引くことを目的として作られた水路。上下2本あり、現役で活躍中である。鹿島藩三代目藩主・鍋島直朝(1622～1709年)によって作られた。

浜川の上流域に当たる奥山地区赤岩から水路を作ったが、現代の様に便利な道具は無いので、石を運び一つ一つ組んで水路を作るとい手作業で行われた。当時は、土水路に水が流れており、それだどうしても水がもれてしまって、結局一本の水路では水が無駄になってしまうので、上下2本の水路を作り、水が無駄にならないように工夫されている。現在はコンクリートの水路となっている。



(取水口)



(嶽水道に入るつり橋)
(鳴瀬荘の入口のため、通行には許可が必要)



(現在はコンクリートの嶽水道。全長約5キロ)

3 奥山分校跡地

明治29年(1896)開校。奥山分校はもともと七浦小学校の分校だったが、昭和33年(1958)に古枝小学校の分校となった。昭和47年(1972)の閉校まで、奥山や竹ノ木庭、矢答等から通学していた。



4 奥山天満宮

奥山と赤岩の境にある。石祠には「太神宮・天満宮・弁財天 安永四未天八月吉日 願主当村中」(1775)とあり、菅原道真のほか、天照大御神、弁財天が合祀されている。

境内には、自然石碑が3基あり、「山神」「猿田彦大神」(寛政4年(1792))、「八大竜王」(文化11年(1813))と、明治9年(1876)の明神鳥居がある。



ふなこえ 鮒越



ほうれきごうそんちょう てんめいごうそんちょう かしまはんりょう
 「宝暦郷村帳」「天明郷村帳」から村名が見える。鹿島藩領。江戸時代初期の産物にスイカがある。3代藩主鍋島直朝のときに築造された西田代堤と菅原堤（鮒越上溜池）は奥山の赤岩から矢答山腹をうがっ『とんのみぞ』によって取水している。
 たほんくろいわむがしたしろにし たしろ なかたに すがわら げんご おおひろき こがさか
 田本・黒岩・東田代・西田代・中谷・菅原・源吾・大廣木・古賀坂の9小字からなる。
 ちおんいん しょうたつしょうにん
 浜の知恩院は、聖達上人により、初めは古賀坂に建立された。



1 石仏・記念碑



2 石仏



3 思栄社

あかいわ ふなこえ
 赤岩から水道を掘り、堤を造って鮒越を開発した3代藩主直朝の恩恵に感謝し、祀ったもの。
 なおとも おんけい まつおかじんじや ぎおんしゃ
 はじめ松岡神社の奥の院として社殿ができ、「祇園社」（直朝書）が掲げられていたが、現在は社殿も壊れて「思栄社」と彫られた石碑だけが残る。
 えん
 鮒越下堤の完成が延宝3年（1675）であることから、社殿もこの時期に建てられたものと思われる。



5 鮒越堤

ふなこえ づつみ
 なおとも ふなこえ かんがいよう たけすいどう
 3代藩主直朝が鮒越の灌漑用に設けた溜池で、嶽水道はここに流れ込む。上堤に弁財天（元禄17年（1704）、五大龍王（嘉永7年（1854）の石祠がある。



4 鮒越天満宮

えんぼう なおとも まんこ
 延宝元年（1673）3代藩主直朝・萬子夫人の長子文丸死亡（10歳）。文丸が病床に臥し、片時も離さず持っていた木像が菅原道真公であったため、貞享4年（1687）に天満宮に安置した。また縁のある文丸の霊を相殿し、文丸の病氣は疱瘡だったので、疱瘡流行の時は、お参りにくる信者が大勢いたという。



6 多良海道・腰掛岩

たらかいどう ふなこえ やこたえ
 多良海道は浜から鮒越を通って矢答へ向かう。その途中に腰掛岩と呼ばれる巨石があり、茶屋や一里塚などもあったといわれる。



みそ五郎どんと溜池の伝説

「みそ五郎どん」は、この地方に住んでいたという大男で、多良岳に腰掛け、有明海で顔を洗っていたという。時には雲仙にも腰掛けに行った。
 ふな鮒こえ越の2つの溜池は、「みそ五郎どん」の足あとに水がたまってできたもので、矢答を中心とした丘陵は、みそ五郎どんが耕したあととだとか・・・。



たけのこば 竹ノ木庭



元々本藩領であったため、今でも大字音成に属する。昭和3年(1928)2月29日飛行機墜落事故
がおこった。荒平・水洗・祭徳・本谷・竹ノ木庭・小川内・矢通山の7小字からなり、矢通山には
みなもとのためとも
源為朝伝説が残る。



1 竹ノ木庭天満宮

はいでん わにくち あまてらすおおかみ
拝殿の鰐口には「天照大神御宝前 奉寄進鰐
口一 西葉村講中 天和四甲子年(1684)二
月吉曜日敬白」、明神鳥居には「天満宮 弘化
四丁末年(1847)」とあるので、いつのまにか天
じんぐう てんまんぐう
神宮が天満宮にかわったと思われる。



2 後藤勇吉飛行機墜落箇所

みやざきけんのべおか し れいめい き
後藤勇吉は、宮崎県延岡市出身の日本の航空黎明期の民間パイロット
いっとう ひ こうきそうじゆうし いっとうこうくし
で、一等飛行機操縦士・一等航空士免許を取得。航空機による旅客輸送、
日本一周飛行などにおいて日本初を成し遂げた。
昭和3年(1928)2月29日、たいへいようおうだん むちやくりく ひ こうけいかく かすみがうら
太平洋横断無着陸飛行計画の訓練中(霞ヶ浦
一大村間)、霞ヶ浦への飛行に同乗。天候不良のため、大村へと引き返す
途中に、竹ノ木庭に墜落。燃え上がる機体とともに帰らぬ人となった。



こうゆうきち ひ こうきつらく いれいひ
後藤勇吉飛行機墜落慰霊碑



墜落現場の状況

のべおか し ないとうき ねんかん
(写真提供:延岡市 内藤記念館)

ななかい 七開



大字音成に属する。歴史は新しく、昭和38年(1963)に策定された「多良岳パイロット事業」により開拓され、広大なミカン畑が広がっている。

また、七開は多良海道沿いにある集落で、海道の名残もとどめている。

やなぎざか ささはら ふじわら じょうかん こ ぼしる

柳坂・笹原・藤原・上館・古場城の5小字からなる。



1 た ら かい どう 多良海道

ながさきかいどう

有明海沿いを通る長崎街道の脇街道して整備された多良海道。

多良海道は、浜宿を抜けた後は山道となり、ふなごえ 鮎越からはやごたえとうげ 矢答峠に向かって尾根沿いの道が続いている。

七開はこの海道沿いに集落が開けており、③庄屋の茶屋跡、④一里塚跡など、その名残をとどめる。



2 婦人ホームからの大展望

あかいわ おくやま

婦人ホームのバス停付近から谷伝いに赤岩と奥山の集落が見える。



4 一里塚跡

3 しょう や ちゃ や あと 庄屋の茶屋跡

七開の梅林

婦人ホームの少し下ったところに広がる梅林。春の訪れをづける絶景ポイント。



5 や ごたえ 矢答

浜や多良から登りきった所にある格好の休息地。水小屋が今もある。(ここから七浦地区)

七開の地名

七開の歴史は新しいが、昔からの小字が5小字ある。
やなぎざか ささはら おおみや どう ふじわら ひがしおや じょうかん
柳坂は音成、笹原は大宮田尾、藤原は東塩屋、上館は
こみやどう こ ぼしる にししおや
小宮道、古場城は西塩屋に属していた。

また、平成13年(2001)九州大学の学生が調査したところによると、七開周辺には「矢立」「深底」「茶屋」「シャレコベ」の四つのしこ名(小字より小さい単位の地名)があるという。

矢立は、源為朝の矢が突き刺さった所という伝説や、昔、とのさまが狩りをする時に、この場所に弓矢を立てたという言い伝えがあり、茶屋は多良海道を通る殿様が休憩したところから、茶屋と呼ばれ、深底はその箇所が周辺よりも少し土地が低くなっているからそう呼ばれているとのこと。「シャレコベ」については、なぞ。戦のあとの「シャレコベ」が田の中からでてきたとか、何とか・・・。

ななはこつつみ

そのほか、七箱堤付近は、「七箱」と呼ばれる。

ひらにたかいたく 平仁田開拓



大字音成に属する。戦後に入植者を募り開拓された地で、18人くらいからスタートであった。

しかし、ここには鹿島最古の遺跡「儀助平洞穴」がある。

本行と平仁田の2小字からなる。



1 儀助平洞穴

平仁田開拓集落の西側斜面で尾根と谷のほぼ中間付近にある、縄文時代の洞穴。昭和47年（1972）に東部中の生徒によって発見された。

調査の結果、縄文時代早期～後期、さらには古墳時代後期にかけての長期間にわたる遺跡と判明。縄文時代の遺物は、早期の押型文土器や、前期の条痕文土器、黒曜石や安山岩製の石器などで、古墳時代の遺物は、須恵器や土師器などが出土している。また、それぞれの時代でろ炉の跡と見られる遺構が見つかったので、この遺跡が住居や狩猟の時のベースキャンプとして使用されていたと考えられている。



しらとりお 白鳥尾



大字山浦に属する。多々良・龍ノ平、七美谷、小川内、下黒内、上黒内、才又、多布木、一本松、七曲、鉾扮、榎谷、坂山、開花、東川内の15小字からなる。

谷で、古枝小学校区と能古見小学校区にわかれる。



1 権現宮

琴路神社の分社として奉祀されている。鉾扮、坂山の両地区の氏神として、両区で管理している。

昭和57年11月に地区民により改築されたことを記す額がかかっている。昔この先に『耶蘇屋敷』と呼ばれる集落があったという。



道標 矢答石碑 ●
矢答の水置場 ●

● 矢答天満宮

飯田

● 矢答公民館

伊福甲

● 矢答峠

〈赤線 多良海道〉

じざんけんじ

のど

23

ふるえだ

古枝の地名の由来



古枝川(錦浪川)は、観潮河川で、かつて字岩本付近まで船がさかのぼっていた。鎌倉時代に有明海の自然陸化と干拓により田畑が開かれてからは、“かつての江”であったことにちなんで、古江田の地名が起ったという。

- ▶ 慶長絵図(1604)「触田」
 - ▶ 『鹿島志』(4代藩主 鍋島直條著)貞享年間(1684～1688)
「我が兄格峰(断橋)、久保山の旧居を以て桂岩師に属して、普明寺と為し古田に退き蔵る。」
 - ▶ 享和元年(1801)御領中郡村附、万延元年(1860)郷村帳 古江田村
 - ▶ 明治四年(1871)古枝村
- ※ コエタと読んだこともある。(仮名帳)
- ※ 明治以降古枝(ふるえだ)に統一された。

江戸初期の産物に薯蕷(山芋)・覆盆子・竹ノ木場村の蜂蜜・冬茄がある。(『鹿島志』鍋島直條著)

古枝の民俗芸能



(上左) 鮒越の鉦浮立



(上右) 上古枝の面浮立

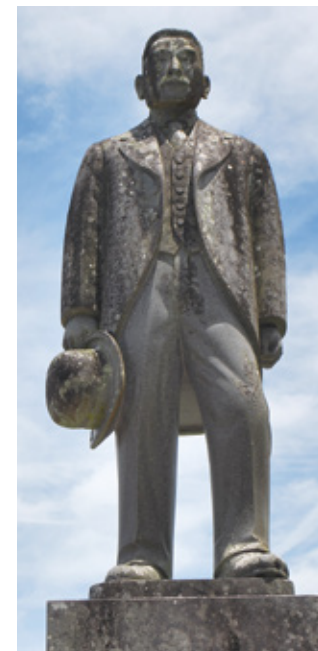


(右) 久保山一声浮立

◎ 古枝の人物

旧古枝村歴代村長名

歴代	氏名	任期	功績
初代	さいしょ 最新	明治22.5～25.1	旧鹿島藩士。古枝村独立運動を起こし、病で倒れるまで初代村長を務めた。独立直後の村民の融和、村政の基礎造り、地方公共事業の発展に尽力した。文学にもすぐれ、槍は免許皆伝。
2代	のりた 乗田 さいだへい 貞平	明治25.1～30.11	古枝村の独立に奔走、村長就任後は、人心の統一を図り、久保山道路の改修をした。のち、郡議員にあげられ、公共事業に尽くした。
3代	なかばやし ながまさ 中林 永昌	明治30.11～33.4	古枝村独立請願委員として、新制度による古枝村の発展に尽力した。槍術の名人。
4代	おのほら 小野原 とらきち 虎吉	明治33.12～昭和7.10	下記参照
5代	かけぞの 掛園 さいいち 齋一	昭和7.12～12.8	古枝村郵便局長を拝命、在郷軍人会藤津郡連合分会会長も勤める。謹厳実直な性格で、社会の信望もあり、2度村長に選ばれた。
6代	みはら 三原 せんざぶ 仙三	昭和13.3～15.6	日露戦争に参戦し、功六級金鵄勲章、勲七等青色桐葉章を授与。村長時代は、古枝村産業組合長を兼務した。
7代	かけぞの 掛園 さいいち 齋一	昭和15.6～21.11	2度目の村長
8代	もろおか 諸岡 しちろう 七郎	昭和22.4～29.3	最後の村長。鹿島市古枝農業共同組合長理事。古枝小学校横の三叉路から祐徳門前入口までの道路拡張工事を行った。



おのほら とらきち
小野原 虎吉
(1864～1935)

古枝村の4代目村長。
村会議員・助役・村長
と古枝村発足当初から43年間、古枝村の
発展に尽くした。
銅像は、現在古枝公
民館横に移設されて
いる。



天満宮の改築碑(昭和6年(1931))

改築碑には寄付金を奉納した人たちの名前が
おぎきてんぶう もりはやさぶ おのほらとらきち
刻まれている。尾崎天風、森隼三、小野原虎吉
など、そうそうたる顔ぶれである。

◎ 古枝出身の著名なひとびと



たじま かつじ
田島 勝爾 (1891~1988)

大正から昭和にかけて、ミカンを始めとした、鹿島の果樹産業の礎を築いた。



なかむら またいち
中村 又一 (1892~1971)

弁護士・政治家。武勲により金鶏勲章を受章。勲二等瑞宝章、紫綬褒章を授与された。この顕彰碑は岸信介（安倍晋三の祖父）による書。



おぎさてんぶう
尾崎 天風 (1886~1960)

国会議員。北海道北見地方の開拓に尽力し、旭川と知床を結ぶ国道の建設に努力し、その実現を見た。この国道の難所である石北峠には、天風顕彰の碑が建てられている。
また、鹿島を思う心は篤く、特に浜駅開設に尽力したと伝えられている。

なかお つたいち
中尾 篤一 (1901~1937)

日本画家。東京美術学校日本画科にすすみ、日本画家として東京の展覧会でデビューした。帰郷後は鹿島高等女学校で図画（美術）教師をつとめながら作画に励み、俊英として将来を嘱望されていたが、病のため35歳の若さでこの世を去った。

ばんじん どうたん
萬仞 道坦 (1698~1775)

古枝村大村方池田家出身。江戸時代中期の曹洞宗の僧。加賀大乘寺の大機行休の法をつぐ。備中本光寺、肥前泰智寺などの住職をつとめ、三河に万福寺をひらいた。号は三休庵。著作に「正法眼蔵秘鈔」「万仞和尚語録」など。

はしもと やすい
橋本 康以 (1902~1983)

若い頃から歌の道に入り、教員で地域の指導者として活動するかたわら、作歌活動を続けた。「橋本野酔」の名は、市内小中学校の校歌や、太良町の「岳の新太郎さん」の作詞者で知られる。鹿島一声浮立の作詞者でもある。

もり はやさぶ
森 隼三 (1878~1949)

古枝村中尾出身の教育者。宝塚舞踊学校（現 宝塚音楽学校）初代校長。

◎ 古写真



祐徳への道



祐徳稻荷神社



祐徳稻荷神社の橋



祐徳神社外苑にて正月の猿廻し



祐徳門前



個人タクシー駐車場